# 二〇世紀の平凡な日常の年代記

## ——クリストフ・ハイン『犢の処刑』に寄せて——

山　本　浩　司

はじめにささやかな物語を置くことにしたい。『ある左官の寡婦』と題されたこの物語は，実は表題に掲げた作品集からではなく，同じ作者の最初の短編集『夜のドライブと朝早く』(1979)からとられたものであるが，そこには物語作者クリストフ・ハインの特質が典型的なかたちで見いだされる。

「昨年の九月のとある週のこと，オーバーシェーネヴァイデのヴールハイデに隣接した墓地ヴァルトフリートホーフに六十八歳の女性が埋葬された。彼女は，同時代の政治的な党派形成にも政治闘争や政治的犯罪にもかかわる気などなかったのに，とても奇妙なかたちで半世紀にわたるドイツの歴史に巻き込まれてしまった。そのために彼女は，知人たちからはかわいそうだと同情されると同時に恥知らずだともみなされてしまって，晩年には外出もままならぬありさまだった。

その女は戦争から復員してきた左官と一九一八年に結婚したが，かれは半年後にはベルリンの三月闘争で射殺された。かれが妻に残したのは腹のなかの子供とドイツ共産党の会員証だった。

戦争寡婦年金を申請して，闘争に加わっていた党派のどちらかの流れ弾に，たまたま近くを通りかかったときに，夫は当たったのだと役所には申し立てなさい。こんなふうに死んだ男の同僚だった同志が，絶望した資産のない女に助言をしてくれた。彼女の要求は認められた。ワイマール共和国は彼女に月々数マルクを支払った。

第三ドイツ帝国は頼まれもしないのに年金の支払いを引き継いだ。女がひそかに驚いたことには，その政権は，ナチ国家のプロパガンダの資料，それにはあいかわらず新聞という伝統的な名称が使われていたが，その資料のなかで彼女の死んだ夫を三月の下手人たるアカどもの手にかかった犠牲者のひとりとしてときどき追悼することを怠らなかった。顕彰年金は増額された。そして寡婦は命が心配であえて異議を申し立てもしなかった。

終戦から五年がたったとき，彼女の夫の同志だった男が，強制収容所から帰還してきて，引きこもって生活していた女を捜し出した。やめてくれと彼女が必死で頼んだのに，左官の死に関する真実を新しい役所に報告するといってきかなかった。一ヵ月後，彼女はファシズムの犠牲者として書類に登録され，社会主義ドイツ国家の年金を受け取った。彼女は年金の受け取りを拒否しようとしたが，女子職員には彼女の動機は納得できるものではないように思われた。戦死した夫の行動や態度とは異なった見解をとってきたのではないかという不信が生じるのを防ぐために，彼女はついには同意した。彼女は住所を移し，友人たちを避け，新しい知り合いとも自分の人生については語らないようにした。そしてファ

シズムにかつて迫害された犠牲者たちの集いには一度として参加しなかったために，彼女の世話をみる役所の機嫌を損ねた。

彼女が死んだとき，何人かの隣人たちは，ただちょっとした買い物をすますために，首をすくめて街路をそそくさと駆けるおずおずとした怯えた女として彼女のことを思い出すことができるだけだった。」

この死者に捧げられた物語には形式のうえでも内容のうえでも小さなものへの愛着が認められる。しかしまさしく小さなものにこだわるがゆえに，ハインは小さな空間のなかに閉じこもり自足してしまうことを免れている。わずか二ページにも満たないような小編のなかに半世紀という厖大な時間が取り込まれているというだけではない。この作品は小さなもの，市井のひとの人生を淡々と記述していながら，あたかも悠然と流れる大河のうえに漂う小さな浮木の姿を追っているうちに目に見えない流れそのものがいつしか感じ取られるように，大きな歴史の運動をあらわにしているのである。

このような小さなものへと向かう傾向は，1977年から1990年のあいだに書きためられていた十六篇の小説を編んだハインの二番目の短編集『犢の処刑』(1994) にも受け継がれている。まず，表題作を別にすると，かなり規模の小さな作品が目につく。また場所と時が指定されていない『松葉杖』や旧約聖書に取材した『モーセの死』を除けば，ほぼどの作品でも，東ベルリンやザクセン地方を舞台にして，主として終戦直後から1980年代なかばまでの時代に生きるごくありふれた人びとの人生が物語られている。しかもここでもたいていかなり長い時間が小さな作品のなかに封じ込められている。そしてこれらの物語を彩る色彩は寒々とした鉛色ということになろう。まず周囲に理解されないままに死ぬ死者たちを描いた作品（『法律の問題』や『ある亡命』）がある。また『片輪』では戦後七年してようやくソ連の強制収容所から帰還できた傷痍軍人が家族から冷たくあしらわれ，汚物のように追い出される。一方，学生時代に東独から逃げ出しケルンに定住した『思いがけぬ再会』の学校教師は，かつてはかれを反国家的だと糾弾するほどに体制側の人間だったのに，今では「亡命した反体制知識人」として西側でちやほやされている風見鶏のような元大学講師に放送局への転職を妨害される。いずれの場合にも，当事者たちは「二度と会うことはなかった」とされている。表題作『犢の処刑』にしても農業共同組合の班長の家庭がふとしたきっかけからとめどなく崩れていくさまを描き出している。ハインの描く世界のなかでは，人と人を結びつける絆は完全に断ち切られてしまっている。そしてほとんどどこにも宥和の可能性は見当たらない。

とはいえ，このような日常のなかの疎外現象を語るハインの語り口は，冒頭に置いた『ある左官の寡婦』を読めばわかるように，極端に感情を押し殺したものになっている。かれはただ事実の経過だけを伝える冷静な報告者の立場をとっているのだ。このような語り手のありようを規定するために，ハイン自身は何度も「年代記作家」ということばを使っている。この概念を理解するうえで，この作品集のなかでは時代設定の点で異色な物語『モーセの死』が参考になるかもしれない。聖書によると，モーセは約束の地をはるかに眺めやることしか許されなかった。そしてかれの遺骸は神がてずから葬ったが，今日にいたるま

でその墓のありかを知る者はいないとされている。しかもモーセが神の怒りを招くことになった理由についても何も語られていない。ハインは，古代の年代記を語り継ぐかたちで，聖書のこの奇妙な空白を埋める作業に着手する。「ある文書，それは，イスラエルの人びとが約束の地に足を踏み入れた後で，その報告の書き手が頑固で嘘つきであるということが判明し，またそれゆえにもはや年代記作者の要職にとどまることができなかったときに，公の場で焼きすてられなければならなかったのだが，その文書のなかにモーセの死に関する記述があった。それはたしかに他の記録とは一致しないし，ほとんど信じてもらえないだろうが，イスラエルの人びとによる良い土地の占有に関して，他の書物とは違った証言をするものとしてその記述に言及しておきたい。」この文書によれば，モーセが神の不興を買った原因は，かれが「良い土地のうえには天がかかっていない」という報告を聞いて約束の地に疑いを抱くようになった点に求められる。しかも「ヤハウェがモーセの遺骸を埋葬したのではなかった……魂の抜けた体は何の覆いも掛けられずにネボ山の麓に放置された。そうしてそれは鳥と野獣の餌となった」という。この架空の年代記作者が，共同体や国教の利害に拘束されることなく，ただ事実を収集して正確に記述しようと努めることによって，政治権力や宗教的権力を脅かしたのだとすれば，ハインの年代記も，公式の歴史が捨象している市井の人びとの生活史をすくい上げることで，権力が隠蔽したり書き直したりした真実を記録にとどめようとしているのだといえそうだ。だとすれば，年代記作者ハインのうちに体制批判者の姿を認めることは間違いではないだろう。とはいえ，それだけでは割り切れないものが残る。というのも，ハインの年代記がどうしてあれほど抑制された筆致で事実を報告するという形式をとらねばならないのか，がまだ説明されていないからだ。もちろん検閲に対する配慮がここに作用しているのだと考えることもできる。しかし例の小さな散文という形式に着目すれば，公式の歴史に対する単なる異議申し立てとは違う相貌もハインの物語には認められるのではないだろうか。

ささやかな文学形式をとることでハインがどのような文学伝統に連なろうとしているのかを推測するのは難しいことではない。暦物語のヘーベルや逸話集のクライストからカフカにいたるドイツ散文の伝統をここであげることができる。ハインはすでに第一短編集に収められた『新しい(もっと幸福な)コールハース』で短編『コールハース』と逸話『新しい(もっと幸福な)ヴェルター』の作者クライストを二重に参照していたが，この新しい短編集でも，先にみた『モーセの死』にも認められるように，クライスト流の複雑綜合文(ペリオーデ)の手法が多用されている。カフカに関しても，短編『掟の問題』の表題をそのまま借りうけた作品がある。しかしこの作品集にとりわけ色濃く感じられるのはヘーベルの影だろう。特に暦物語『思いがけぬ再会』には二編の小品が捧げられている。表題を借用した同名作品のほかに，五〇年間の世界の動きを一息に描写する例の有名な一節を模倣した作品がある。しかしこのような表面的な関連よりも決定的なのは，この短編集のハインが近代の小説に対して取っている姿勢そのものである。近代小説に馴れ親しんだ者がこの小説集を読んで何よりも戸惑うのは，そのなかで登場人物たちの「内面」がほとんどまったく語られていないということだろう。近代小説が個人の内面の告白に重きを置いて成立したのだと

すれば，ハインはそれとは違った方向に目を向けようとしているようにみえる。その際にかれは，ヘーベルを参照しながら，小説の台頭とともに衰退した口承の物語への回帰を試みているのだといえないだろうか。

この点で注目されるのが炭鉱の材木屑を持ちかえるザクセンの坑夫がブランデンブルクから移ってきた新任の守衛に業務上横領の嫌疑をかけられる『マッツェルン』という作品である。この短編集では一人称形式をとった『松葉杖』を除けば，基本的には三人称の形式で物語は語られているのだが，この作品に限って「私」が他人の物語る話をそのまま書き写すという枠物語の形式が採用されている。こうして口承の物語の現場が再現されることになる。しかもハインは「手工業の親方」を内なる物語の語り手に仕立てている。時代錯誤の誹りを受ける危険を冒してまでハインがあえて「親方」という表現を選んだのは，口伝えの物語の担い手であった階級に敬意を表したためといえなくもない。ただし当然のことながらヘーベルの時代と今日では大きく社会的状況が変わっている。それに応じて物語の性格にも違いが生じている。ヘーベルの物語に漂っている炉辺での団欒の暖かい雰囲気は，ハインに期待すべくもない。このような全体的な印象の相違を別にすれば，啓蒙に対する見解が両者のあいだで大きく隔たっているという点が注目される。もちろん暦物語の結末にときどきつけられるヘーベルの「ご注意！」は，ベンヤミンが指摘したように，単なる教訓を語るだけにとどまるものではない。むしろヘーベルは道徳という異物さえも叙事文学のなかに組み入れたというべきなのだろう。しかしこの標識によってかれの暦物語が寓話に限りなく接近する場合があるのは間違いない。これに対してハインの物語は，たしかに形のうえでは落着するけれども，物語の要点がどこにあるのか説明してくれるものが欠けているために，どこか釈然としない感じがつねに残る。確かに『マッツェルン』の内なる語り手は注釈めいたものを付け加えている：「その毎日の習慣にもかかわらず，坑夫にとって最後に土に帰るのが他の人たちより簡単だということはないだろう。」しかしこの注釈はもはや物語を補い説明するようなものではなく，物語からほとんど遊離してしまっている。それどころかこの語り手は物語そのものを唐突に中断してしまってさえいたのである。今日においては物語が共有される場が成立しがたくなっているということ，そして物語と教訓が幸福なかたちで結びつけられる可能性が失われたということがここでは示唆されているようにみえる。したがって物語の生(なま)の場を再現したこの『マッツェルン』は，まさに伝統的な意味での物語への回帰がもはや不可能であるということを証明しているということができる。

もちろんハインの物語が教訓的な言辞を控えている背景には，文学が啓蒙的な役割を演じることに対するハイン自身の強い警戒心がある。「今日おこなわれるべき啓蒙はこれまでとは違った機能を果たさなければなりません。情報を受け取っていない人を啓蒙するということはもはや問題ではありません。同じ量の情報を手にしている他人と対話するということが問題なのです……対話はそれどころか教訓をたれるということの反対物なのです。」しかしまさしく啓蒙的な意図が頑なまでに避けられているために，ハインの物語はかえって物語としての純粋さを獲得することになる。なぜなら「ひとつの話を再現することによっ

て，それをあれこれの説明からとき放ってやることが，すでになかば物語る技術だといってよい」（ベンヤミン『物語作者』）からである。とはいえ，ことばを控えた物語そのものが逆に解釈を誘発するという側面があるのも否定できない。途方にくれた読者のなかにはハインの物語を何かの比喩あるいは体制批判のための道具として読んで安心してしまいたいという誘惑に駆られる者もいるだろう。例えば，いつまでも聖杯の夢をむなしく追い求める老いさらばえた騎士団の姿を描いたハインの喜劇『円卓の騎士たち』(1989) は，輝きを失った社会主義の理想を唱えつづける東ドイツの政治家たちを揶揄した寓意劇だとみなされることが多かった。『モーセの死』を同じように解釈して，空のない倒錯した約束の地を「天が地上に実現されたところには天は必要ない」という詭弁で擁護する長老カレブの姿に体制寄りの知識人の姿を見ることもできなくはない。あるいはまた物語『犢の処刑』の家族崩壊を引き起こす直接のきっかけに注目して，社会主義の計画経済の破綻と融通のきかない官僚制度に対する批判をここに読み取る立場も成り立ちうるだろう。そしてこれらの口当たりのよい解釈に正面きって異論を唱えるのはたやすいことではない。しかしこのようにして物語にふたたび教訓の足枷をはめてしまうのでは，物語の語り手としてのハインに接近することができないということだけは確かだ。ハインの読者は，寓意的な解釈の誘惑にあくまでも屈せずに，居心地の悪さに耐えつづけなくてはならない。その意味で，ハインの物語は教訓を孕みながらも，その教訓を像に刻むことを禁じているのだということもできる。

そしてこのような物語への徹底した意志が，ハインの年代記を単なる歴史記述や情報の鮮度だけに頼るルポルタージュの類から区別することになる。心理描写を手控えたハインの物語は一見するとただ事実を並べたてただけに見えるかもしれない。実際にまたそこには一連の事件に脈絡をつけるべき説明が欠けている。しかしまさにこの点に年代記の特質があるのである。ベンヤミンのことばを借りれば，歴史を書く歴史家ができごとを何とかして説明する義務を負うのに対して，年代記作者は歴史を物語るのである。歴史を語るとは，言い換えれば歴史を騙ることに等しい。ここに創造的な要素が加わる。ハインは，たとえ詳細な状況設定を行なうことで単なる事実の報告を装っているにしても，同時代史の縮図となりうるような個人の小さな物語をわざわざ創造しているのだ。ただしこの騙られた雛形としての歴史は，場合によると，本来の歴史記述にもまして時代の流れの本質を明確に示すことがありうる。

例えばヘーベルの『思いがけぬ再会』を意識した『強姦』では，主人公イローナの過去と現在が，つまり祖母がソ連赤軍兵士によって乱暴されるという悲劇を体験した一九四五年と彼女が政府の高官としてベルリンの青年式でソ連邦を讃える祝辞を述べる一九八三年という時点が独特な方法で結びつけられる。「その間にベルリンのフランクフルター・アレーは，かつては大フランクフルターと呼ばれていて，戦争の後には廃墟となっていたのだが，ソビエトの政治家の誕生日にかれに敬意を表してスターリンアレーと改称され，新たに建築されるべき建物の最初の礎石がそこに置かれた。そのアレーにはスターリンの記念像が立てられ，第三回世界ユースフェスティバルに際して室内競技場の落成式典がおこ

なわれた。幸運な賃借人たちはアレーの完成した住宅に移り住んだ。そしてヨーロッパで初めて鉄筋コンクリートの骨組み構造による施工法がスターリンアレーの住宅では使われた。ある春のこと，このアレーの建築労働者たちはストライキをおこない，それによって全国的な規模の叛乱を引き起こした。その叛乱はソビエトの戦車の助けを借りて終結させられた。ある晩スターリンの記念像は倒されて，どこか知らないところに運ばれたが，後になってその青銅像の寄贈者，ソビエト連邦に返却された。このアレーは今ではシュトラウスベルガー広場を経てアレクサンダー広場にまで通じていたが，その第二の建築時期が始まった。スターリンアレーはカール・マルクス・アレーと改称された……建物は大規模建築法で建てられはじめた。室内競技場は取り壊された。このようにしてこのアレーと街は新たに瓦礫の山から生まれた。この美しくてひどい世界のなかで生活はなるように進んでいった。この国の新聞はすばらしい世界については報道したが，ひどい世界については沈黙を守った。」 過去と現在を隔てる時間が無視されてしまうことなく，しかもそれでいてただちに消滅してしまうようなこの記述方法はヘーベルから学ばれたものである。ただしお手本に見られた世界主義（コスモポリテイスムス）はここではすっかり影をひそめ，ほぼ四〇年間におよぶ歳月の経過はベルリンの一街路を定点として観測する手法で捉えられている。ところがまさにこの極小の点が戦後史の大きなうねりを記録する地震計のような役割を果たすのである。この通りの名称の変遷ばかりではなく，スターリン時代の歴史的な様式からフルシチョフ時代の機能的な様式へと，その時代ごとに公認された様式にしたがって築かれたそれぞれの建造物が，文字通りの記念碑として，何よりも雄弁に戦後史のなかの権力の移り行きを証している。しかもこの東ベルリン最大の目抜き通りは，同時に社会主義の理想への信頼が最初に裏切られた一九五三年のベルリン暴動の震源地でもあった。その限りで，希望と幻滅，その双方の痕跡が残された場所でもある。この小さな空間には現代史が凝縮されて示されているということができる。同じことはひとりの女性イローナの経歴という小さな歴史にも当てはまるだろう。彼女は「社会的出自ゆえにこれまで能力にみあった教育をうけることができなかった人びとのために設立された労農学部」の恩恵を受けた。しかし彼女の原点には解放軍を強姦者として体験したあの忌まわしい事件がある。さらに戦後四〇年の政治の動きも彼女に幻滅を味わわせたに違いない。彼女は社会主義の光と影をその一身に背負っているのだ。だとすれば彼女の物語はもはや誰か特定の個人のものではなく，戦後そのものの履歴だとさえいえるのではないだろうか。

ハインはこのように歴史の雛形を提示することによって，単なる歴史記述の枠を越えているばかりではなく，心理描写や説明を回避して多様な解釈の余地を許すことで，短命なルポルタージュに陥ることを免れてもいる。それゆえに「壁」が崩れる前の日常を描いたハインの年代記は今日なお読むに値するのだ。『強姦』でも登場人物の心理を説明するものはほとんどない。あの四〇年間のあいだにイローナは祖母の事件をただ忘れようと努めたのだろうか，それともこの体験は社会主義の理想を追求する彼女の心につきささる刺のようなものだったのだろうか。いずれにしても彼女はソ連との友好関係を讃える演説をする。そして赤軍を批判すべきではなかったにしても，讃える必要もなかったと感想を述べる夫

に対して，彼女は「ファシスト」という呪詛のことばを投げつけて泣き崩れるのである。彼女のこの行動をどのように解釈するかは，われわれに委ねられている。もしかすると彼女は本気で社会主義を肯定しつづけていて，夫の裏切りが許せなかったのか。あるいは自分も同じように考えながらも，状況が許さないので沈黙しているのに，小賢しく第三者的な見解を述べる夫に腹を立てたのか。それとも自分が懸命に抑圧していた気持ちを夫が図らずも突いたので，気が動転したのか。解釈の可能性はほとんど無限にある。このことばを理解するためには，恐らく彼女の体験をみずからのものとして生きなおすほかないだろう。そのとき，彼女の苦悩はわれわれにとっても遠いものではなくなるはずだ。ただし生きなおすという限りは，誠実でなければならない。このことはとりわけ死者に捧げられた物語の場合に当てはまる。死者たちの行動の本当の動機や思いのたけはどこにも書かれていない。この死者たちの完全な沈黙に対して安直な図式を当てはめて安心してしまう不誠実だけはもちろん許されない。それは死者を冒瀆する生者の傲慢でしかないだろう。とはいえ死者に接近するためには，物語を取り巻く空白を何とか埋めるほかに手立てはない。しかも死者がもはや何も答えてくれない以上，その沈黙を埋めようとするわれわれの回答の試みはつねに暫定的なものにならざるをえない。死者たちの思いをくりかえし追想すること，この終わりのない作業をハインの物語はわれわれに強いているのである。ハインの物語を読むとは，それを手がかりにして無数の新たな物語を紡ぎつづけることにほかならない。

**Christoph Hein: Die Exekution eines Kalbes und andere Erzählungen.**
Berlin und Weimar (Aufbau) 1994, 190 S.